



やっと出会えた、本物の技術者たちとともに。

いわき靴下 ラボアンドファクトリー

代表 西村京実さん



一番右が、いわき靴下ラボ アンド ファクトリー代表/株式会社ウエスト代表取締役 西村 京実さん

惜しいよ。もったいないよ。そんな声が上がった。21年前、泣く泣く岩手の工場を閉鎖したときのことだ。ねぎらいには感謝しつつも、それならば何故もつと仕事に見合った正當な価格で取引していただけたのか、の想いが胸を突きあげていた。安い外国製に押され、多くの同業者がおなじ運命をたどった。だれも閉じたくて閉じたのではない。あの日の悔しさは今も消えない。株式会社ウエストの源流は、初代の西村信次郎が文京区の関口に西村商店を設立し、手回しの機械で靴下の製造を始めたことにかのぼる。1902年(明治35年)のことだった。

だれよりも努力を惜しまない、 工場の人たちこそが主役になる。

これを継いだ二代目の信次郎、すなわち西村京実さんの祖父は、大きく事業を拡大させ、業界の先頭に立っていた。通産省の企業誘致委員もしており、1964年(昭和39年)、みずから岩手県に新たなストッキング会社、東北ナイロン株式会社を立ち上げた。これに加わって奮闘したのが父であつたが、まもなく病いに侵され、これからという時に世を去った。その夫の遺志を受け継いだ母は、しかしモノづくりにはまったくの素人だった。旧態依然とした男性社会のなかで、涙ぐましい苦勞の日々がつづいていく。

必死で頑張つてはいたものの、やがて時代は急変していく。そのうち海外の安価な靴下が入って来て国内の工場はどこも疲弊し、販売先が次々に倒れていた。母はみずから中国に渡り、その目で実態を確かめ、ついに覚悟した。ここでは新しい機械がずらりと整備され、日本とはまるで勢いが違った。もう、かなわない。退職金が払えるうちに岩手を閉じるしかない。2000年(平成12年)2月に入社していた娘の西村京実さんは、いきなり工場の閉鎖が主たる仕事となった。

ところが、である。信頼関係もできてこれからのいうときに、耳を疑うような情報もたらされた。同事業所はすでに株式譲渡されてアツギ株式会社の傘下にあつたが、生産体制の再編にともない事業所自体が閉じられることになった。思わず必死で走り出していた。たいせつな工場を手放す経験をした自分たち。そして、卓越した技術を有しながら、不幸にも、短期間に二度も仕事を失う悲劇に遭遇した人たち。モノづくりを一旦はあきらめた者同士がいっしょになれないか。その一念だった。

文〓瀧 春樹



北陸富山の地で、家族の手で守り継がれてきた100年葡萄。

ホーライサン ワイナリー

代表 山藤智子さん



ホーライサンワイナリー株式会社代表取締役 山藤 智子さん

丘の上をやさしい風が吹き、グラスのなかで美しい液体が揺れている。ホーライサンワイナリーで葡萄酒を眺めながらいただくワインは、国産の葡萄だけで自然なまま醸し出された、作爲のない爽やかさを有している。液体は透明に澄んで何も語らぬが、しかしここにたどりつくまでには、長い長い家族の格闘の日々があつた。最初に葡萄を手がけた初代、山藤重信は、さまざまな果実がたわわに実る理想の総合果樹園を夢見て、1921年(大正10年)に広大な土地の開墾に取りかかった。ようやく葡萄の苗木の植え付けにこぎつけたのが6年後の1927年(昭和2年)、そこから最初の出荷までにはさらに4年がかかった。

途方もない長い時間が流れて、 ことしもいいワインができました。

ただ、他の果樹は風害や食害に会うことが多かったが、葡萄だけは倒れても起き上がるしなやかな強さがあり、総合果樹園はおのずと「山藤葡萄園」となった。初代にはもう一つの構想があつた。この時代は大正の中期から長く稲作の不作が続いており、米を酒米には回せない。そこで思いついたのが、葡萄による酒造だった。そして1933年(昭和8年)、初代は果実酒醸造免許を取得し、まったくの手探りで葡萄酒づくりを始めた。二代目の茂森は、新たに山地を拓

た。醸造免許の返納は止めたものの、目算があつたわけではない。経営は変わらず困窮を極めていた。冬は除雪作業員として働きに出て、長距離トラックの運転手もこなし、内と外で働き続けて父は必死に家業を守った。末っ子だった智子さんも例外ではなく、10才くらいから国道沿いで、一人でぶどうとワインを売っていた。そばにいる人間は誰であれ、みんなが働かなければならなかった。できることはすべてこなしながら、智子さんにはどこかに過酷な労働から解放されたい気持ちもあつ

と房のみ」の、相当に効率のわるいワインづくりを貫いている。ひと言でいえば、日本の農業技術がいつぱいに詰まった、まさに「誠実なワイン」そのものである。多くのワイナリーが消え去り、今では北陸最古のワイナリーとなつた。おいしい料理や雑貨、アパレルを展開し、葡萄の樹の下で音楽イベントも開催する。丘の上は幸福な時間に満ちている。かつて曾祖父が描いた総合果樹園は、しっかりと花開いている。

文〓瀧 春樹